

# 課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学籍番号 16DC1611  
氏名（本籍） 高韻茹（中国）  
学位の種類 博士（学術）  
報告番号 甲第/2/号  
学位授与年月日 2022（令和4）年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
論文題目 張作霖と鉄道建設

審査委員  
主査 三好 章  
副査 黃 英哲  
副査 長井 千秋



2022（令和4）年2月16日  
愛知大学大学院中国研究科

## 審査の結果の要旨

高韻茹の提出した課程博士学位請求論文は、政治家としての張作霖の再評価を目指したもので、政治心理学にもとづくパーソナリティ分析、地域権力分析を基礎に、中央と地方との関係、張自身の鉄道建設とそれらをめぐる北京政府・日本との関係を素材に、検討を試みている。全体は「満洲某重大事件」によって中断された張作霖の評伝の形をとっている。以下、その概要を示す。

第1章では、張作霖のパーソナリティを分析している。辛亥革命までの張作霖は人情義理に厚く、好い機会を利用することにたけ、地域での実力を蓄えようとする愛郷主義が土台となっていた。これらは、幼少期の連年の天候不順による不作が父や兄を奪い、学ぶ機会が得にくかったことなどの生育環境が関係する。張から見ると、父の張有財は正義感が強く、弱い者の味方であり、兄も同様の人物であった。兄の死後、張は兄嫁とその子供の世話をし、甥を軍隊に入らせて重用した。日清戦争後、地域自衛集団に加わった張はその運営に長じ、自ら地盤を持つ重要性を痛感し、部下を育てた。地域自衛集団の創設にあたり、彼は勇気と決断力を持ち、正義感が強く人情義理に厚いという周囲の評判を得ることができた。

第2章では、北京政府との軍閥競争をめぐる張作霖の政治的人格を分析している。辛亥革命を経て中華民国成立後、張作霖は北洋派に属して中央に進出した。袁世凱の死後、張は北京政府の動向をにらみながら吉林・黒竜江へ勢力を拡大し、奉天軍閥を形成した。東三省掌握後、張は直隸派と競い合ったが第一次奉直戦争で直隸派に敗れた。奉天帰着後、張は直ちに奉天軍の改革に取り組み、2年後の第二次奉直戦争では、直隸派の核心的部隊に壊滅的打撃を与え、リーダーの呉佩孚に亡命を余儀なくさせた。これは、運が良いだけではなく、張自身の勇気と知略による所が大きい。張は計略を巡らして勢力圏を拡大し、人材を招聘し、奉天軍閥の中華民国における政治的地位を確かなものにしていった。

第3章では、満洲と日本について述べている。まず前近代以来の「満洲」の歴史的概略を述べた後、近代の同地域史を概観する。それは、南下政策をとるロシアを北方に、列強が競い合う場所であった。日露戦争後、日本による南満洲鉄道会社の設立によって満蒙地域の鉄道建設が本格化する。満蒙の鉄道政策は地政学そのものであった。すなわち、国家は自らの利益の拡大を目指し、権力で領土を奪い、その勢力下におこうとするものであった。日本の満洲経営政策は満洲・日本本土・植民地台湾・朝鮮との間に経済圏を形成しようとするだけではなく、世界経済への影響力も持とうとするものであった。一方、清朝・中華民国でも鉄道敷設ブームがおきており、南満洲鉄道会社はその機会を得て、満洲地域において清政府・中華民国政府とともに鉄道を敷設し、経済の大幅な発展に貢献した。

第4章では、奉天軍閥の自営鉄道を分析する。第一次奉直戦争後、張作霖は東三省自治保安総司令を称し、東三省の自立を宣言した。同時に、京奉鉄道を閔内・閔外に区分けした。奉天軍閥は、石炭等軍需品の運輸問題に取り組むために奉榆鉄道局を設置し、京奉鉄道の培養線として錦朝鉄道・打通鉄道の敷設に着手した。第一次奉直戦争によって京奉鉄道が途絶したため、石炭の運輸が一時問題になったが、打通鉄道と錦朝鉄道によって解決することができた。これは奉天軍閥にとって最も重要なことであった。第二次奉直戦争後、鉄道の重要性を理解していた張作霖は自営鉄道敷設の計画を立て、奉海鉄道敷設設計画に本格的に着手した。王永江代理省長は、南満洲鉄道会社に交換条件として洮南から昂々渓に至る鉄道と吉林から敦化に至る鉄道の建設請負を認め、奉海鉄道敷設を認めた。また、敷設にあたって外国製の材料・車輌を採用したが、そこには日本汽車製造株式会社代理店奉天大倉洋行が含まれていた。これらのことから見て、奉海鉄道敷設設計画が排日運動の一環ではなかったことが証明できる。

第5章では、第一次世界大戦後の日満関係を分析する。日本・奉天軍閥間の鉄道利権には、借款

優先権・敷設権・経営権の三つが含まれる。第一次奉直戦争後設置した奉榆鉄路局は錦朝鉄道と打通鉄道の敷設権を引き続き保有し、奉榆鉄路局が両者を経営した。しかし、錦朝鉄道と比べて打通鉄道の延長線は満鉄の既得利益権を侵害する恐れがあったため、日本側は何度も抗議した。一方、奉海鉄道と吉海鉄道は満鉄の培養線であった。奉天軍閥は奉海鉄道の敷設権・経営権及び洮昂鉄道の敷設権を獲得し、満鉄側は洮昂鉄道の借款優先権を有した。奉海鉄道に比べ、吉海鉄道は日本の既得利益権に抵触するもので、同鉄道の建設も懸案の一つになった。これらに関して、東方会議において対支政策綱領を作成したが、「満洲某重大事件」で交渉は中断した。張作霖の息子張学良は奉天軍閥を継承すると、従来の対日方針を一変させ、東三省における排日運動も激化していった。この時期は張作霖政権の鉄道政策とは全く異なり、日本側の既得利権を無視する満鉄包囲政策が採用され、日満関係の一層の悪化がもたらされた。

張作霖は、鉄道によって自分の政治資本を拡大するつもりであったのに北伐に直面してその基盤を失い、さらにまた日満関係の解決が不充分であったため、自弁鉄道政策自体が日満関係悪化の一因となった。張作霖の鉄道政策は満蒙地域での自弁鉄道熱・排日運動等を高揚させる結果ともなったのである。こうした事実は、日本にとって利用しやすい軍閥であって、利用価値がなくなったがゆえに爆殺されたという従来の表面的に流れた見方に対して、地域権力としての奉天軍閥を対置させることになり、張作霖自身のナショナリズムへの傾斜の可能性をうかがわせることになりうる、と結論付けている。

上記の概要の提出論文について、主査三好章、副査長井千秋、同黃英哲による課程博士学位に関する予備審査を行い、2021年11月3日付で本審査への移行を妥当とする予備審査報告を行った。そして2022年1月26日（水）15:00～16:00の時間に、上記3名の審査委員が台北の高韻茹に対して最終試験を遠隔による口頭試問を行った。その際、申請者はPPTを用いて自らの学位請求論文に関するプレゼンテーションを行い、審査委員の理解に供した。そこでは、本文中の述べたことの補足として、結論部分を強化するいくつかの点が提示された。具体的には、地域から軍閥として成長していった張作霖について、勢力範囲の拡大に伴う名声の拡張などを「愛郷主義」という言葉で表現した。また、張の政治堤行動として奉天軍閥としての外交を、日本を含む列強との対等かつ自立性を求めたものとし、その文脈で第二次奉直戦争での日本との協力を見る視点、自営鉄道に関して中華民国史における利権回収運動の流れに沿ったものであること、さらに自営鉄道が日本にとっての満蒙問題、さらに張とその後継者にとっては「ポスト奉天軍閥時代」に継承されるものであることを指摘した。論文全体としては、政治心理学の方法論による1920年代華北・満洲史であり、政治学でしばしば用いられる人物の類型化により、張作霖の行動をローカリズムからナショナリズムへの発展過程にあったものの、「満洲某重大事件」によって中断され、課題は息子張作霖に引き継がれたと位置付けた。今後の課題としては、鉄道を軸とした日本・ソ連・奉天の三者関係の整理分析、張作霖の対日関係の更なる分析の必要性などをあげた。

申請者の論文概要説明の後、主査を皮切りに質疑応答が行われた。まず、歴史的事象を扱うことからくる方法論上の相違、概念操作の問題点が指摘された。具体的には「愛郷主義」が取り上げられたが、申請者はすでに用語として存在していること、成立した中華民国との矛盾はあるものの、自立を目指す張作霖とブレインとしての王永江らとの議論の分析などはまだ不十分であるので、今後の課題としたいが、地域主義に基づいたナショナリズムに向かい始めた時代状況、また帝国主義時代の最中に中華民国自体が誕生したばかりで国力は不充分、問題が山積する中で、張が自立を目指していたことを考察しなければならないとの返答があった。また、提出論文のタイトルが必ずしも本文の主張をうまく表現していないのではないか、中断された張作霖の志向がその後どうなったのかをもう少し具体的に示して欲しかった、などの指摘があり、これにもそれらを踏まえて、今後の研究に生かしたい、との回答があった。

申請者への口頭試問終了後、台北との回線を切断して審査委員会を行った。総じて、申請者本人が本来の日本語話者ではないためにおこる日本語表現の未熟さが散見され、注釈や参考文献の提示方法にやや難がみられるものの、それらは本論文を日本語書籍として出版する際に解決すれば済むことであり、先行研究の整理・内容・論理の展開など、主要な諸点においては課程博士学授与に相当する水準にあるもの、と判断した。

以上

2021年11月3日

愛知大学大学院  
中国研究科長 殿

審査委員

主査 三好 章

副査 黄 英哲

副査 長井 千秋



### 課程博士学位論文予備審査報告書

大学院博士の学位授与に関する内規第7条の規定により、学位論文の予備審査を行った結果、下記のとおり報告いたします。

記

・被審査者氏名 16DC1611 高 韻茹

・学位論文題目 張作霖と鉄道建設－1920年代まで

・外国語の諮問の必要性の有無

有 • 無

・学位授与申請の受理の可否

(可) • 否

・備 考

2021年11月3日 予備審査委員会決定

以 上